

黒土館跡

発掘調査報告書(4)

1999-3

秋田県鹿角市教育委員会

序

近年の大規模な土木工事に伴う発掘調査は、地下に眠る多くの歴史を掘り起こし、日本国内至るところで「大発見」のニュースが毎日のように聞かれるようになりました。

その中でそれに携わる多くの人達が、我々の見たことのない祖先が歩んできた道を、研ぎ澄まされた洞察力と地道な作業の中から発見します。

その発見が、時には、重要なそして大きなメッセージとなり、現代という「時間」を過ごす人々にいろいろなことを教えてくれます。

偉大なる祖先がたどってきた足跡を学び、そしてそれを価値ある未来へと生かして行くこと、これこそが私達、文化財保護行政に携わる者にとっての責務であり、その課せられた仕事の重要さを改めて認識しております。

本書は、急傾斜地崩壊防止事業に伴う、黒土館跡第4次発掘調査の成果をまとめたものであります。

文化財保護行政に対するご理解と、歴史解明の糸口となれば幸いの存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力くださいました関係機関・各位に心より厚く感謝申し上げます。

平成11年3月

鹿角市教育委員会

教育長 淺利 忠

例 言

- 1 本報告書は、秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陳場に所在する黒土館跡第4次の調査成果をまとめたものである。
- 2 報告書の執筆は、調査員である藤井安正、花海義人が分担し、まとめは花海義人が執筆した。
- 3 資料の鑑定については、下記の方々に依頼し、協力を得た。

陶磁器鑑定 金沢大学 教授 佐々木達夫

石器等鑑定 秋田県立十和田高等学校 教諭 鎌田 健一

- 4 土層・土器等の色彩については『新版標準土色帖』（日本色彩研究所）を使用した。
- 5 報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の『花輪』（S:1/2,5千）を使用した。
- 6 遺物の整理・報告書作成の一連の作業は、藤井、花海、調査補助員・作業員が行なった。
- 7 報告書に収載した図版のスケールについては、各々に示した。なお、写真図版については 任意の縮尺とした。
- 8 報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように務めたが、繰り返し使用される用語については、簡略しているものもある。
- 9 図版等で下記のような記号、スクリーン・トーンを使用した。

S D-----空堀・縦堀

-----確認面以下の土層

- 10 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の方々よりご指導・ご助言をいただいた。

記して、感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

関 直（盛岡市立高等学校）、工藤 清泰（青森県浪岡町史編纂室）

板橋 範芳（大館市教育委員会）、桜田 隆（秋田県埋蔵文化財センター）

高木 晃（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

本文目次

序

例言

本文目次

図版・表・写真図版目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の館跡 1
2. 黒土館跡の歴史的背景 2
3. 黒土館跡の立地と現況 3
4. 遺跡の層序 4

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過 7
2. 調査要項 7
3. 調査の方法 8
4. 調査の経過 8

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 帯郭と検出遺構 9
2. 出土遺物 13
 - (1) 陶磁器 13
 - (2) 鉄製品・古銭 13
 - (3) 縄文土器 13
 - (4) 石器・土製品・石製品 13

第Ⅳ章 調査のまとめ 18

参考文献

報告書抄録

図版・表・写真図版目次

図版目次

| | | |
|------|-------------------|----|
| 第1図 | 黒土館跡の位置 | 1 |
| 第2図 | 黒土館跡現況図 | 2 |
| 第3図 | 黒土館周辺切絵図 | 5 |
| 第4図 | 基本土層図・第1～4期構築面土層図 | 6 |
| 第5図 | 各期遺構配置図 | 10 |
| 第6図 | 各期遺構配置図 | 11 |
| 第7図 | 1帯郭縦掘り平面・土層図 | 12 |
| 第8図 | 空堀底部集石 | 12 |
| 第9図 | 出土遺物(1)(PL) | 14 |
| 第10図 | 出土遺物(2) | 15 |
| 第11図 | 出土遺物(3) | 16 |
| 第12図 | 出土遺物(4) | 17 |
| 第13図 | 館跡分布図 | 22 |

写真図版目次

| | | |
|------|--------------|----|
| PL 1 | 黒土館跡全景(1) | 24 |
| PL 2 | 黒土館跡全景(2) | 25 |
| PL 3 | 黒土館跡全景 調査区全景 | 26 |
| PL 4 | 調査区全景 | 27 |
| PL 5 | 調査区全景 | 28 |
| PL 6 | 出土遺物(1) | 29 |
| PL 7 | 出土遺物(2) | 30 |

第 I 章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の環境

秋田県の最北端に位置する鹿角市は、十和田・八幡平両国立公園という雄大でやさしさあふれる自然にかこまれている。これら豊富な自然を求め、人々がこの地に集まり、古くはその歴史が縄文時代にまでさかのぼり、市内の至る所に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が分布している。

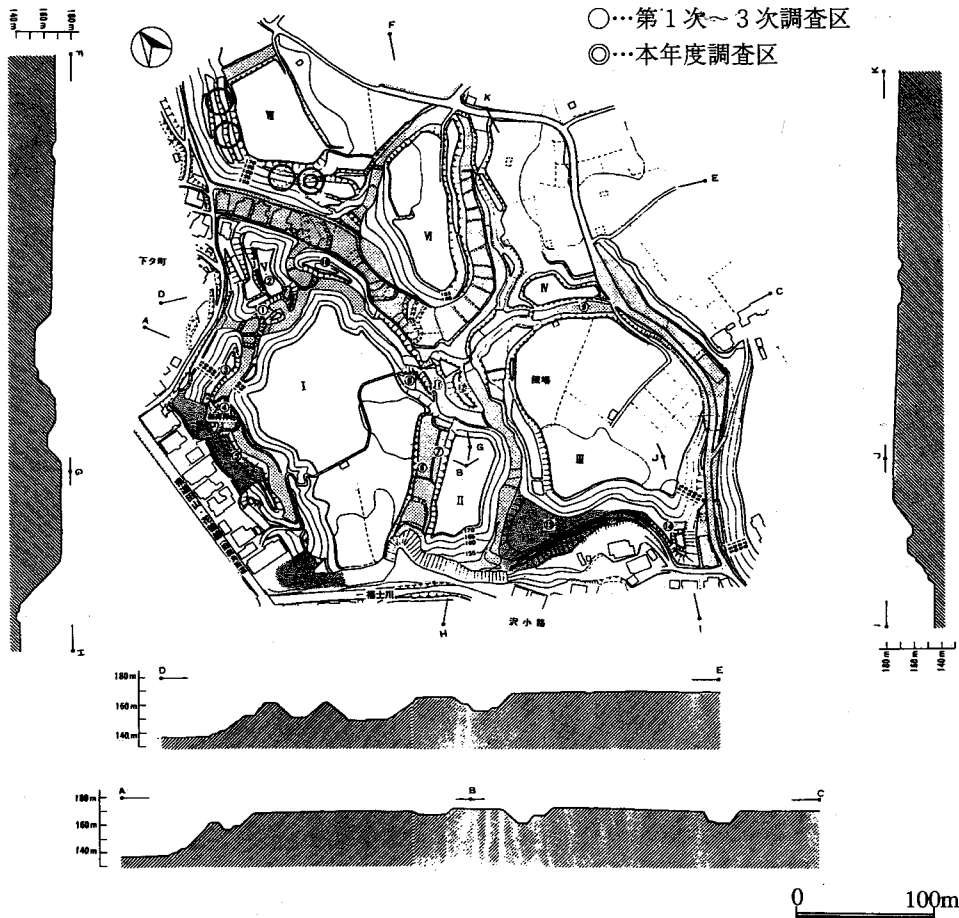
市内を悠々たる水を湛えるながら流れる「米代川」は、川を舞台とした多くの伝説・伝記を生み現在でも語り継がれている。そして、鹿角盆地をかこむ周囲の山々から流れ出る、大小様々な支流は、その流域に複雑な地形を発達させている。この地形は中世の代表的な遺跡である「館」を構築するには最適な地形であったようである。それらを巧みに利用し鹿角市には多くの「館」が作られ、その数は60をかぞえ、現在では「鹿角四十二館」として知られている。

本調査地である黒土館跡もその一つで、福土川の右岸台地、花輪市街地の北東端にある。

周辺には東側 500m に花輪古館跡、南東 750m に孫右衛門館跡、南 650m には近世の館跡ある。また、米代川を挟んだ西側対岸には、かいぬま館跡、高瀬館跡等が一望できる。なお、本館跡



第 1 図 黒土館跡の位置



第2図 黒土館跡現況図

郭上面の北東端には、館を区切る空堀を挟んで、縄文時代中期の大集落「天戸森遺跡」がある。

本年度は黒土館跡第Ⅶ郭南側斜面を調査した。

(藤井安正)

2. 黒土館の歴史的背景

黒土館の歴史的背景については、鹿角市文化財調査資料30『館跡航空写真測量調査報告書 鹿角の館』掲載の「黒土館跡」の「黒土館跡の歴史的背景」を参考に要約した。

黒土館跡については、「鹿角由来集」によると、〈一、黒土村、黒土丹後領名字秋本有り〉と記されていることから、黒土館跡が館主が秋本氏であったと考えられている。

秋元氏は、鹿角四氏（奈良・阿部・成田）の一人である。中世鹿角に於いて威を振るった武士団で、鎌倉期に鹿角郡に所領を得た関東武士団の地頭代が、その出自であるとされている。また、秋元氏の惣領は、黒土館跡の対岸にある高瀬館に居た高瀬氏であったことまでは推察されているが、秋元氏についてはまだまだ不明な点が多いようである。

また、秋元氏は西山地区、八幡平地区、小坂地区と手広くその所領の分布が知られているが、

出自同様、秋元氏の動静については、それを伝える史料がほとんどない。このことは、他の鹿角三氏についても同様である。

数少ない文献である「鹿角由来集」によると、秋元氏はかなり早い時期に周辺有力武士団による鹿角争奪戦の過程で、没落・離散したことを示唆する記事がみられる。

このことを裏付けるように、北秋田地方や、津軽地方には鹿角秋元の流れを汲むと伝えられる家があるといわれる。

黒土氏についても、詳しいことはわからないが、恐らく秋元氏と同じ経路で、没落・離散したものと思われる。その離散した時期は永祿9～12年（1566～69）の南部氏・安東氏の鹿角争奪戦以前と推察される。

黒土館跡は、天正末年まで機能を果たしていたらしく、戦国期以降も存立していたと考えられ、天正19年（1591）には破却された。

3. 立地と現況

黒土館跡の立地と現況については、鹿角市文化財調査資料30『館跡航空写真測量調査報告書 鹿角の館』の「黒土館跡」の「黒土館の立地と現況」を要約した。

黒土館は西流する富士川の右岸台西縁の「イワの上」と通称される西南隅付近を中心とする東西400m、南北370mの範囲に構築されている。館跡に西縁から館跡内部に大きな沢が入り込み、この沢の西側に計7個の郭が構築されている。

富士川によって、南側斜面の崩壊は著しく、また、急傾斜地災害防止工事による破壊が進んでいる。

第Ⅰ郭（南北185m×東西110m）

Ⅰ郭は、黒土館の西南端に位置する。南東に位置するⅡ郭とは空堀によって、また北東のⅥⅦ郭とは大きな沢によって区切られている。本郭の南側は断崖絶壁となり、破壊が著しい。郭上面は平坦で、山林・原野・畑地等となっている。東縁部中央付近に通路跡と思われる平場が下方の帯郭・空堀に通じている。Ⅰ郭は、黒土館の主郭と考えられる。

南西端であった平場は土取りによって消滅し、現在は小平場として残る。北側から西側にかけては、土塁が一巡し、Ⅴ郭との間には空堀がある。北東下にも土塁がある。

第Ⅱ郭（70m×30m）

Ⅰ郭の南東側に空堀を挟んで対峙する。郭上面は平坦で、現況は荒地となっている。西縁下4mの北側に細長い平場がある。北東端に一段低い平場がある。

第Ⅲ郭（115m×115m）

本館の南東側に位置する。空堀、沢等により他の郭及び御林堂のある南東台地と区切られている。Ⅰ郭と同程度の大きな郭である。上面は平坦で、北側には空堀が巡り、北西部分には階

段状の平場があり、西方には土塁、空堀がある。西側斜面には平場があり、南西部の遺構はほとんど消失している。

第Ⅳ郭 (20m×55m)

東端に位置する小さな郭で、Ⅲとは空堀により、西側台地とは沢、小溝により区切られる。

第Ⅴ郭 (35m×10m)

I郭の北側に位置する小さな郭で、南下方には通路と考えられる小道がある。

第Ⅵ郭 (100m×40m)

I郭の北東側に位置する。三方を沢に囲まれ、北側の台地とは空堀によって分断されている

第Ⅶ郭
本館の北側に位置し、南側の第Ⅵ郭とは空堀により区切られ、北側台地とは空堀によって分断されている。なお、北東側から南側斜面にかけてが、本調査地である。 (花海義人)

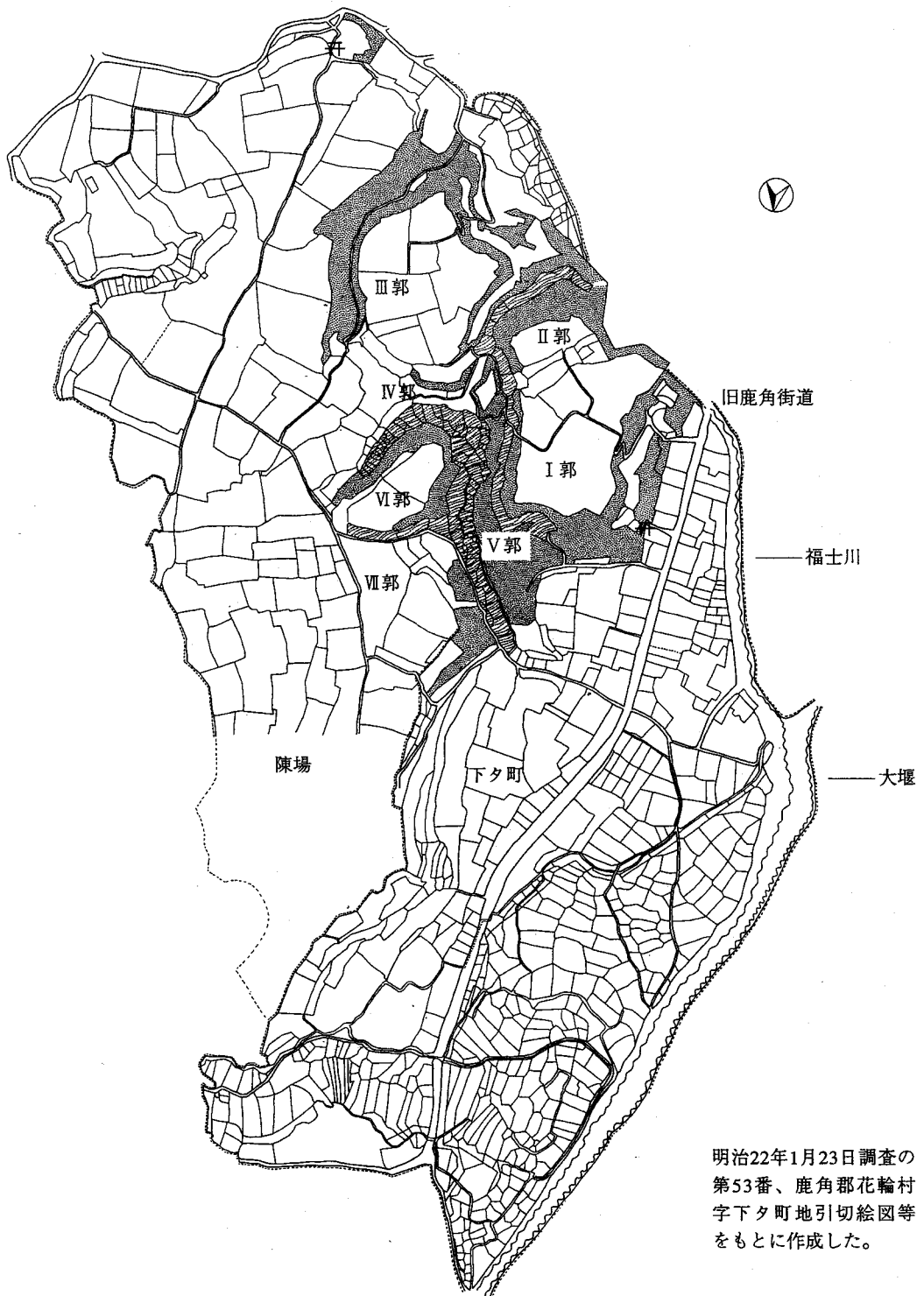
4. 遺跡の層序

遺跡の層序については第 図のとおりである。郭上部に設置したトレンチ部分は、畑地による耕作により地山(シラス層)上面まで攪乱されていた。

第Ⅰ帯郭は9層からなり、IとⅡ層は表土・耕作土である。Ⅲ層は地山(シラス層)であるが第Ⅰ帯郭はこの面を削って、第1期構築面を作り出している。1～5層はそれぞれ第2～3期構築面である。

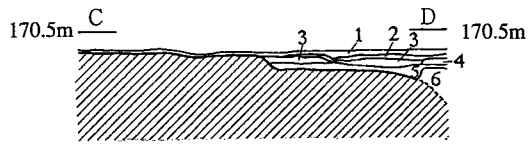
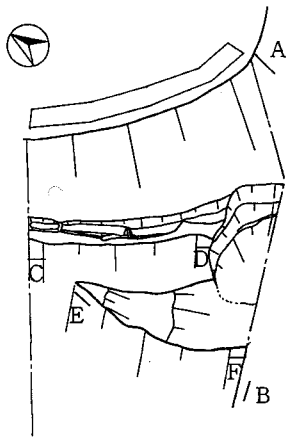
第Ⅱ帯郭の22～31層までが第1期構築面で、20、21が第2期～第4期構築面である。

なお、当初第Ⅲ帯郭の存在が推測されていたが、上部土砂が流れ込んで堆積したものであることが確認された。 (藤井安正)



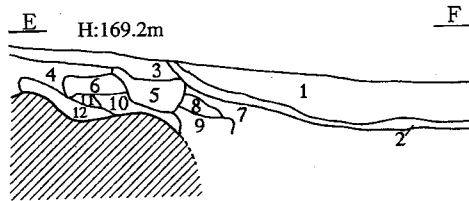
明治22年1月23日調査の
 第53番、鹿角郡花輪村
 字下夕町地引切絵図等
 をもとに作成した。

第3図 黒土館周辺切絵図



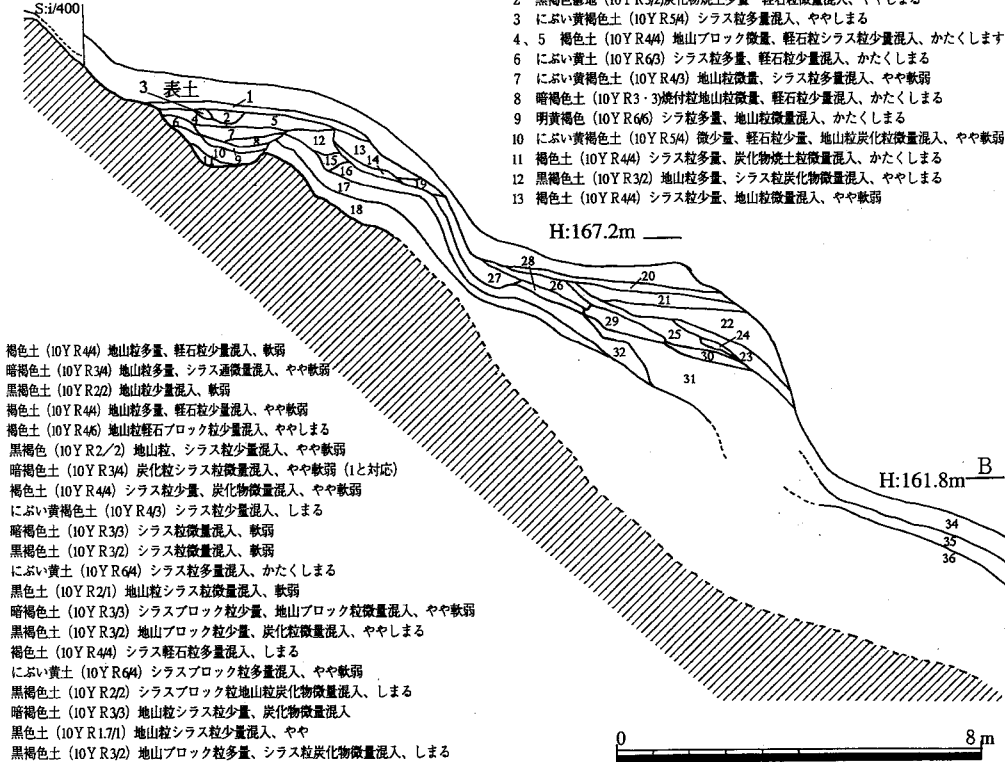
- 1 黒褐色土 (10Y R25) 軽石粒少量混入、軟弱
- 2 暗褐色土 (10Y R33) 軽石粒少量、炭化物微量混入、やや軟弱
- 3 にぶい黄褐色土 (10Y R43) シラス粒少量混入、しまる
- 4 褐色土 (10Y R44) シラス粒軽石粒少量混入、やや軟弱
- 5 にぶい黄褐色土 (10Y R54) シラス粒少量混入、軽石粒少量混入、かたくしまる
- 6 黒褐色土 (10Y R22)

- 1 暗褐色土 (10Y R33) 軽石粒少量、炭化物微量、シラス粒少量混入、かたくしまる
- 2 黒色土 (10Y R22) 軽石粒少量、黒色土少量、シラス粒少量混入、ややしまる
- 3 にぶい黄褐色土 (10Y R54) 軽石粒少量、シラス粒少量混入、しまる
- 4 黒褐色土 (10Y R32) 軽石粒シラス粒少量、地山ブロック微量混入、やや軟弱
- 5 にぶい黄土 (10Y R64) シラス粒、やや軟弱
- 6 褐色土 (10Y R44) 地山粒少量、軽石粒少量混入、やや軟弱
- 7 暗褐色土 (10Y R33) シラス粒少量混入、やや軟弱
- 8 黒褐色土 (10Y R32) シラス粒少量混入、ややしまる
- 9 黒色土 (10Y R21) 浮石粒少量、軽石粒少量混入、しまる
- 10 黒褐色土 (10Y R32) 軽石粒少量、シラス粒少量、炭化物微量混入、しまる
- 11 大湯浮石
- 12 黒褐色土 (10Y R22) シラスブロック粒少量、炭化物微量混入、しまる



- 表土、暗褐色土 (10Y R34) 炭化物微量、軽石粒シラス粒少量混入、やや軟弱
- 1 暗褐色土 (10Y R34) シラス粒軽石粒少量混入、しまる
 - 2 黒褐色土 (10Y R32) 炭化物焼土少量、軽石粒微量混入、ややしまる
 - 3 にぶい黄褐色土 (10Y R54) シラス粒少量混入、ややしまる
 - 4、5 褐色土 (10Y R44) 地山ブロック微量、軽石粒シラス粒少量混入、かたくしまる
 - 6 にぶい黄土 (10Y R63) シラス粒少量混入、軽石粒少量混入、かたくしまる
 - 7 にぶい黄褐色土 (10Y R43) 地山粒少量、シラス粒少量混入、やや軟弱
 - 8 暗褐色土 (10Y R3-3) 焼付粒地山粒少量、軽石粒少量混入、かたくしまる
 - 9 明黄褐色土 (10Y R66) シラス粒少量、地山粒少量混入、かたくしまる
 - 10 にぶい黄褐色土 (10Y R54) 微量、軽石粒少量、地山粒炭化物微量混入、やや軟弱
 - 11 褐色土 (10Y R44) シラス粒少量、炭化物微量混入、かたくしまる
 - 12 黒褐色土 (10Y R32) 地山粒少量、シラス粒炭化物微量混入、ややしまる
 - 13 褐色土 (10Y R44) シラス粒少量、地山粒少量混入、やや軟弱

A H:178.0m



- 14 褐色土 (10Y R44) 地山粒少量、軽石粒少量混入、軟弱
- 15 暗褐色土 (10Y R34) 地山粒少量、シラス通過量混入、やや軟弱
- 16 黒褐色土 (10Y R22) 地山粒少量混入、軟弱
- 17 褐色土 (10Y R44) 地山粒少量、軽石粒少量混入、やや軟弱
- 18 褐色土 (10Y R46) 地山粒少量、シラス通過量混入、ややしまる
- 19 黒褐色土 (10Y R2/2) 地山粒、シラス粒少量混入、やや軟弱
- 20 暗褐色土 (10Y R34) 炭化物シラス粒微量混入、やや軟弱 (1と対応)
- 21 褐色土 (10Y R44) シラス粒少量、炭化物微量混入、やや軟弱
- 22 にぶい黄褐色土 (10Y R43) シラス粒少量混入、しまる
- 23 暗褐色土 (10Y R33) シラス粒微量混入、軟弱
- 24 黒褐色土 (10Y R32) シラス粒微量混入、軟弱
- 25 にぶい黄土 (10Y R64) シラス粒少量混入、かたくしまる
- 26 黒色土 (10Y R21) 地山粒シラス粒微量混入、軟弱
- 27 暗褐色土 (10Y R33) シラスブロック粒少量、地山ブロック粒微量混入、やや軟弱
- 28 黒褐色土 (10Y R32) 地山ブロック粒少量、炭化物微量混入、ややしまる
- 29 褐色土 (10Y R44) シラス粒少量混入、しまる
- 30 にぶい黄土 (10Y R64) シラスブロック粒少量混入、やや軟弱
- 31 黒褐色土 (10Y R22) シラスブロック粒少量、地山粒炭化物微量混入、しまる
- 32 暗褐色土 (10Y R33) 地山粒シラス粒少量、炭化物微量混入
- 33 黒色土 (10Y R17/1) 地山粒シラス粒少量混入、やや
- 34 黒褐色土 (10Y R32) 地山ブロック粒少量、シラス粒炭化物微量混入、しまる

第4図 基本土層図・第1～4期構築面土層図

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至までの経過

秋田県鹿角土木事務所では、平成7年度より黒土館跡の北東部において複数年に渡る急傾斜地崩壊防止事業を計画し、秋田県教育庁文化課に発掘調査を依頼した。県文化課では多量の事業量を抱えていることから、鹿角市教育委員会へ発掘調査の打診があった。これを受けて3月下旬に3者の協議を行い、当教育委員会が調査・報告書作成を行なうことで合意した。

本調査は、これに伴う第4次発掘調査である。発掘調査委託契約を平成10年4月1日に締結し、調査は事業計画を考慮し、同年4月13日から開始することとした。

2. 調査要項

- 1 遺跡名 黒土館跡（鹿角市遺跡番号：306）
- 2 所在地 秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陳場ほか
- 3 調査目的 急傾斜地崩壊防止対策事業に伴う発掘調査
- 4 調査面積 437㎡
- 5 調査期間 発掘調査 平成10年4月13日～5月20日
整理・報告書作成 平成11年1月20日～3月31日
- 6 事業主体者 鹿角土木事務所
- 7 調査主体者 鹿角市教育委員会
- 8 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課
主任 藤井安正
主任 花海義人
- 9 調査参加者 調査指導員 武藤祐浩（秋田県教育庁文化課 学芸主事）
調査員 安村二郎（鹿角市編さん委員）
調査補助員 柳沢和仁、前田 泉
作業員 佐藤一男、土井口敬三、苗代沢ノブ、柳沢勝江、宮沢トミエ、
柳館愛子、柳沢ヤス、柳沢恵美子、佐藤良子、木村千鶴江、
児玉フデ、米村スミ、川又リサ、高村サツ、木村ミツエ、
兎沢サツ子、田中美千栄、田中栄子、田中ミヤ、
工藤昭三郎、工藤チエ子、福島美紀子、黒沢文子、
成田由紀子、佐藤敦子

| | | | |
|----|-------|--------|------|
| 10 | 生涯学習課 | 課長 | 佐藤文弥 |
| | | 主席課長補佐 | 三上 豊 |
| | | 主査 | 秋元信夫 |
| | | 主任 | 藤井安正 |
| | | 主任 | 花海義人 |

11 調査協力機関、協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県出納局管財課
花輪第一中学校、佐藤 樹、古川孝政、関 直

3. 調査の方法

調査区は、急傾斜地に位置することからグリッドの設定は困難であった。このことから、便宜的に帯郭を大きなグリットと仮定した。

遺構確認面及び帯郭構築面までの表土・堆積土の除去は手掘りとし、抜根作業は、遺構の崩壊を最小限に留めるため人力とした。遺構については、上面で確認することに務め、確認順に番号を付した。遺物の取り上げは帯郭（上段よりⅠ帯郭～Ⅱ帯郭とした）・各層ごとに取り上げた。

遺構の実測については、平板測量によって、縮尺 1/100・1/40・1/20で図化した。

写真撮影には、カメラ3台を使用し、作業の進行状況ごとにモノクロ、カラー、スライドフィルムに収めた。

4. 調査の経過

発掘調査は平成10年4月13日から開始し、5月20日に終了した。調査経過の概要は、次のとおりである。

4月13日、作業員への事務連絡、作業説明を行なう。同日より20日までは、調査区内の杉枝の処理や抜根作業、土留柵の設営に全力を費やすとともに、上部郭に2m×20mのトレンチ堀を始める。17日にはトレンチ部分の写真記録をし、埋め戻しを行なう。20日からⅠ郭間の斜面とⅠ郭平坦部の表土～耕作土除去作業を開始する。22日より調査区南側にトレンチを入れ始め、遺構各期ごとの掘り下げ方を確認する。24日より斜面部分の表土とⅡ郭とその下の堆積土の表土除去作業にとりかかる。28日には、Ⅰ帯郭のⅣ期生活面での遺構確認を行ない、写真記録及び平面図作成終了後、層を下げ、随時同作業を繰り返しながら5月14日には空堀を確認する空堀精査と合わせ、斜面の地山までの掘り下げ作業も開始した。

19日には全ての精査作業を終え、全体写真撮影を行なう。20日までに、遺構の精査、写真撮影、図面作成等を行い、現地での調査を終了した。

(藤井安正)

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 帯郭と検出遺構（第5～8図）

帯郭はこれまでの調査により、4時期に分けられて構築されていることがわかっていたが、本調査区においても同様の確認をすることができた。帯郭も昨年度調査地より連続し、空掘も同様のことがいえた。また、昨年度崩壊により確認されなかったⅡ帯郭が本調査によって確認されたため、Ⅱ帯郭も連続することが明確となった。

また、当初Ⅲ帯郭の存在も予想されたが、Ⅱ帯郭下の平場は上部からの土砂が流れこんで堆積土したものか、館構築時の余土であったものと考えられる。

なお、Ⅰ・Ⅱ帯郭での構築時期の古い順に記述する。

（第1期）館跡構築初期のものである。地山（シラス面）の斜面部分を削り、幅5m前後の帯郭を作り出している。さらに、帯郭と平行して長さ20m、幅2～3m前後、深さ20～120cmの空掘が構築されている。空掘底部には大小の礫が確認された。また、平場南側には斜面部分に幅4m程の縦堀りが確認された。図面上では空掘と重複しているように見えるが、堆積土から縦堀りは第1期構築時の初期に掘られ、途中で止められてものと考えられる。

また、シラス面を削り、Ⅰ帯郭からの排土を利用しⅡ帯郭も構築される。

（第2期）第1期で構築された空掘を埋め、それと重複するように再度空掘を作り出す。さらに郭縁際に若干盛り土し、帯郭の幅が広げられている。2期目に構築された空掘は、幅60cm前後、深さ30cm前後の溝的なものである。

Ⅱ帯郭もさらに盛り土がなされ、若干郭の面積が狭まる。以後、Ⅱ帯郭は第4期まで若干の張り土をしながら通して使用される。

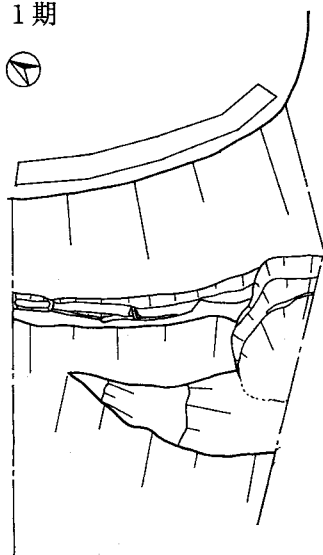
Ⅰ帯郭から古銭1点、縄文土器破片1点、Ⅱ帯郭から縄文土器破片1点が出土した。

（第3期）第2期で構築された空掘を埋め戻すと共に、帯郭全体に盛り土を施し平坦にしている。また、郭北側のやや上部斜面部分に幅20cm程の平場を作り出している。これは昨年度の調査区でも確認されており、これからつながってくるものと思われる。

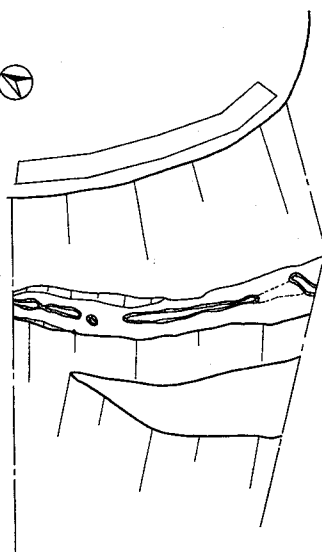
Ⅰ帯郭から鉄滓3点、縄文土器破片1点が出土している。

（第4期）第3期構築面で確認された平場部分まで盛り土し、郭全体を平坦にし、3期で構築された小平場は存続される。

1期

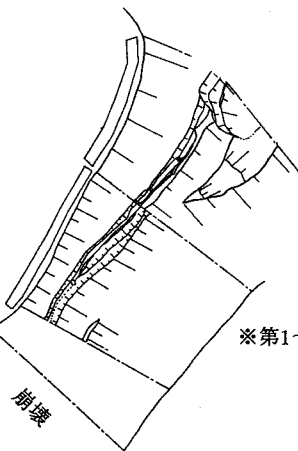
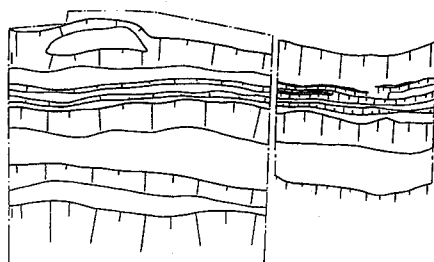


2期



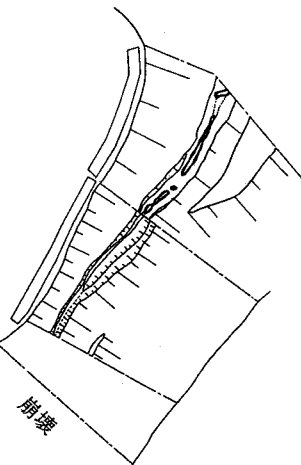
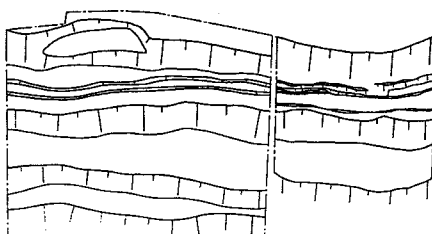
0 10m

1期



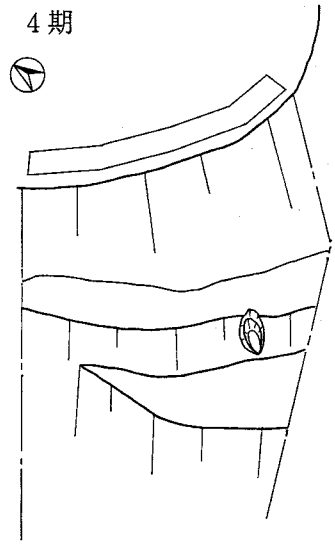
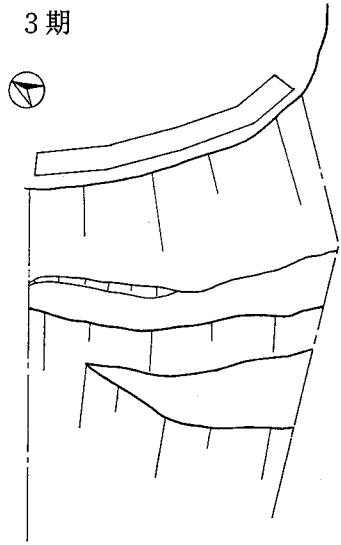
※第1～4次の調査区を合せたものである。

2期

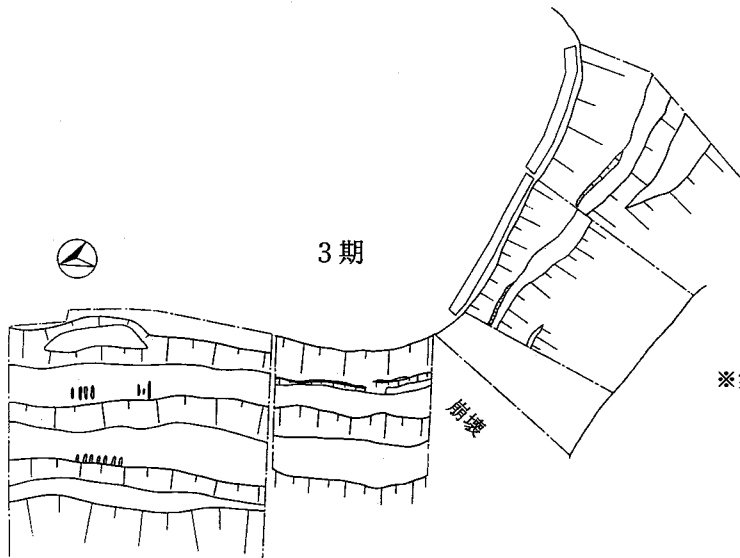


0 20m

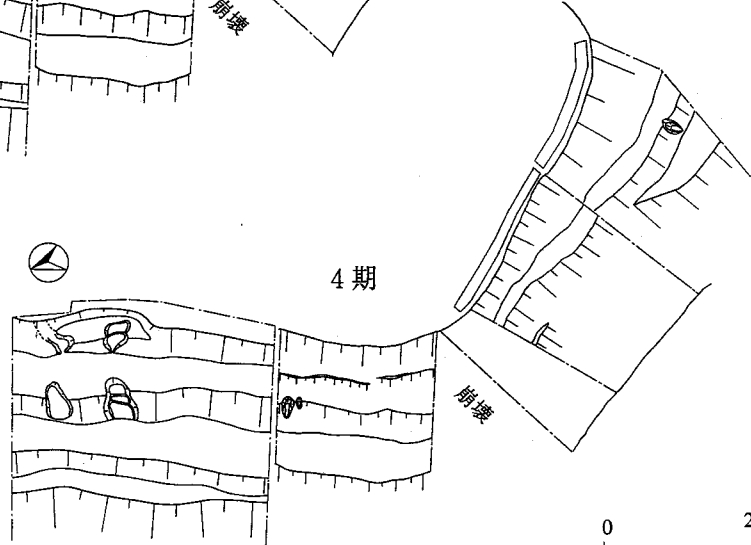
第5図 各期遺構配置図



0 10m

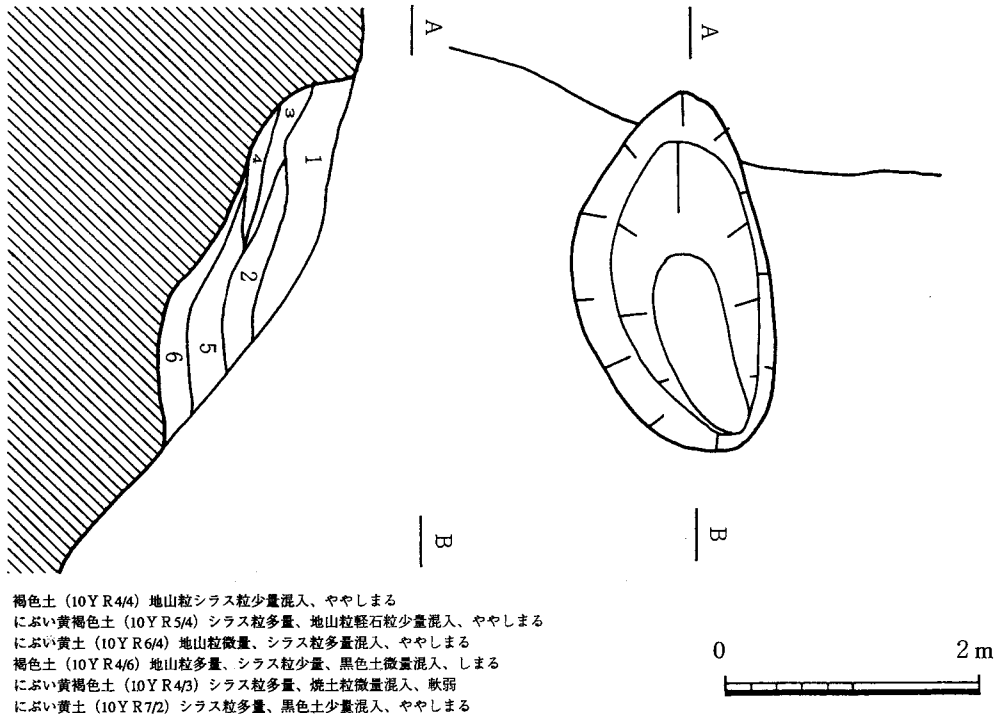


※第1～4次の調査区を合せたものである。

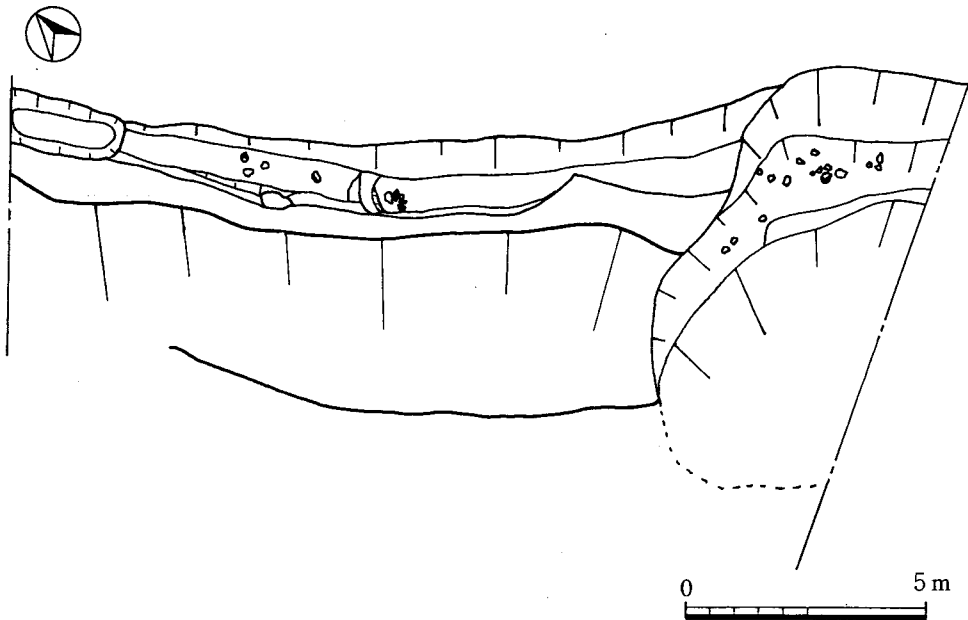


0 20m

第6図 各期遺構配置図



第7図 1帯郭縦掘り平面・土層図



第8図 空堀底部集石

また、第1期で構築された縦堀り部分に新たに、小規模な縦堀りが構築されている。縦堀りは第1、2次調査区からも確認され、用途は不明であるが、水が流れた痕跡がみられることから排水に関連した遺構と考えられる。

I 帯郭から鉄滓1点が出土している。

2. 遺構内・外出土遺物

調査区遺構内・外からは陶磁器、鉄滓、古銭、縄文土器破片、石器が出土した。概要については以下のとおりである。

(1) 陶磁器 (第9図)

調査区より多数出土したが、館期を決定づけるものはなかった。

なお、ここでは黒土館跡をとりまく環境、隣接する花輪館等と関連すると考えられる19点(19C)に限定して記述する。

1は国産青磁の碗か香炉で、産地は不明である。2～6は肥前系染付けで、4は重ねものの蓋で、2が油壺、3が徳利、5・6が瓶である。7～11は肥前系染付けの碗で、12～14は唐津系の鉢である。15～19は肥前系染付けで、15が中皿、16～19が小皿である。

1 帯郭、2 帯郭、斜面の表土及び耕作土からの出土である。

(2) 古銭・鉄滓 (第11図)

調査区より、古銭3点、鉄滓12点が出土した。このうち古銭1点は1 帯郭第2期面から鉄滓3点が1 帯郭第3期面から、1点が1 帯郭第4期面から出土している。

古銭は、腐食、磨耗がはげしく種類、年代等は判別できない。その他の鉄滓は郭斜面部分やI 帯郭耕作土から出土した。

(3) 縄文土器・土器破片利用土製品 (第10、11図)

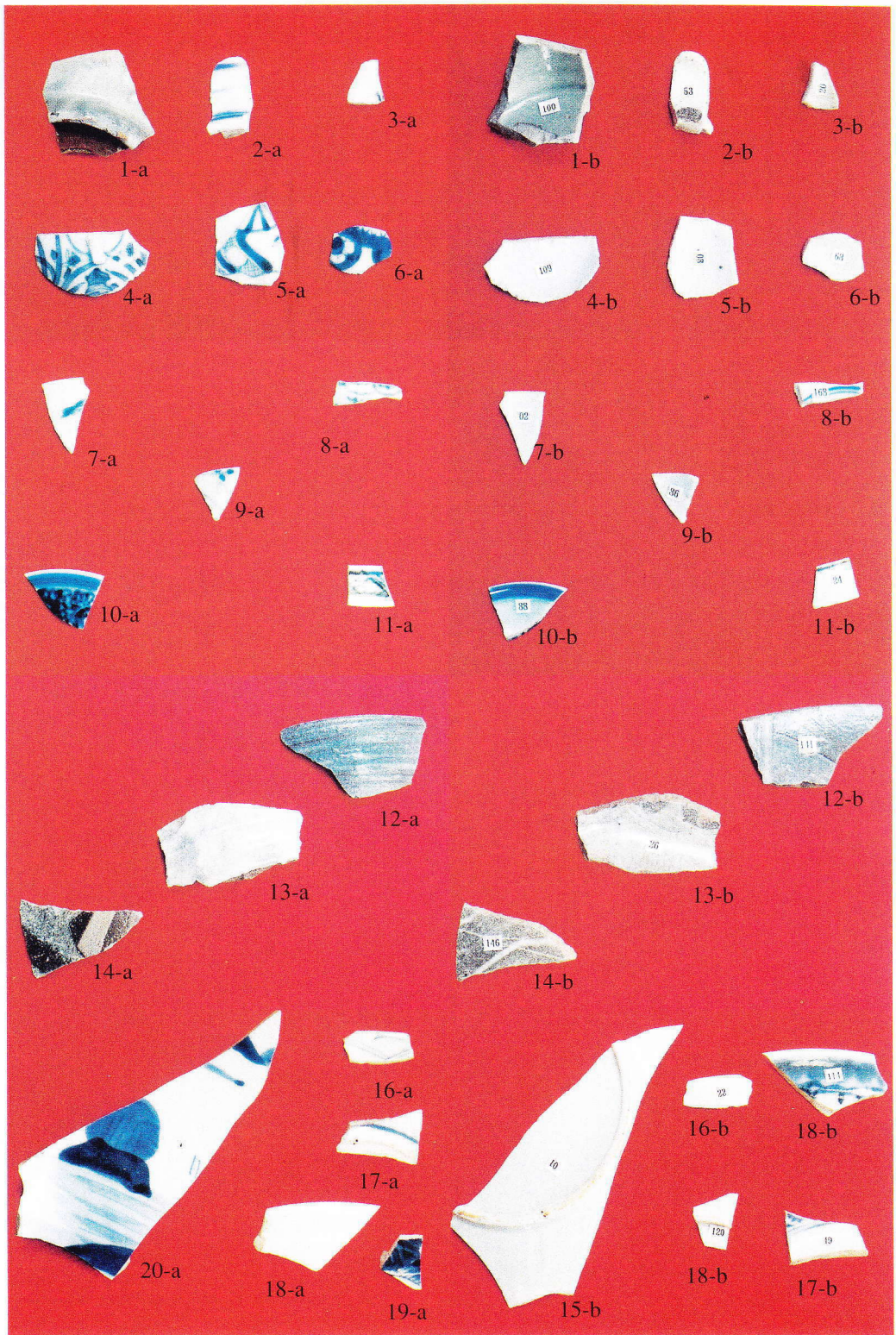
調査区より、縄文土器破片が79点出土した。30は第2期構築面からの出土である。L R、R L縄文が施紋されているもの他、沈線によって「〇」・「L」・「D」字状区画文が横位に連結するものが多い。8はキャリバー形土器の口縁部分である。

これまでの調査同様、郭上部の天戸森遺跡から流れ込んだものであろう。

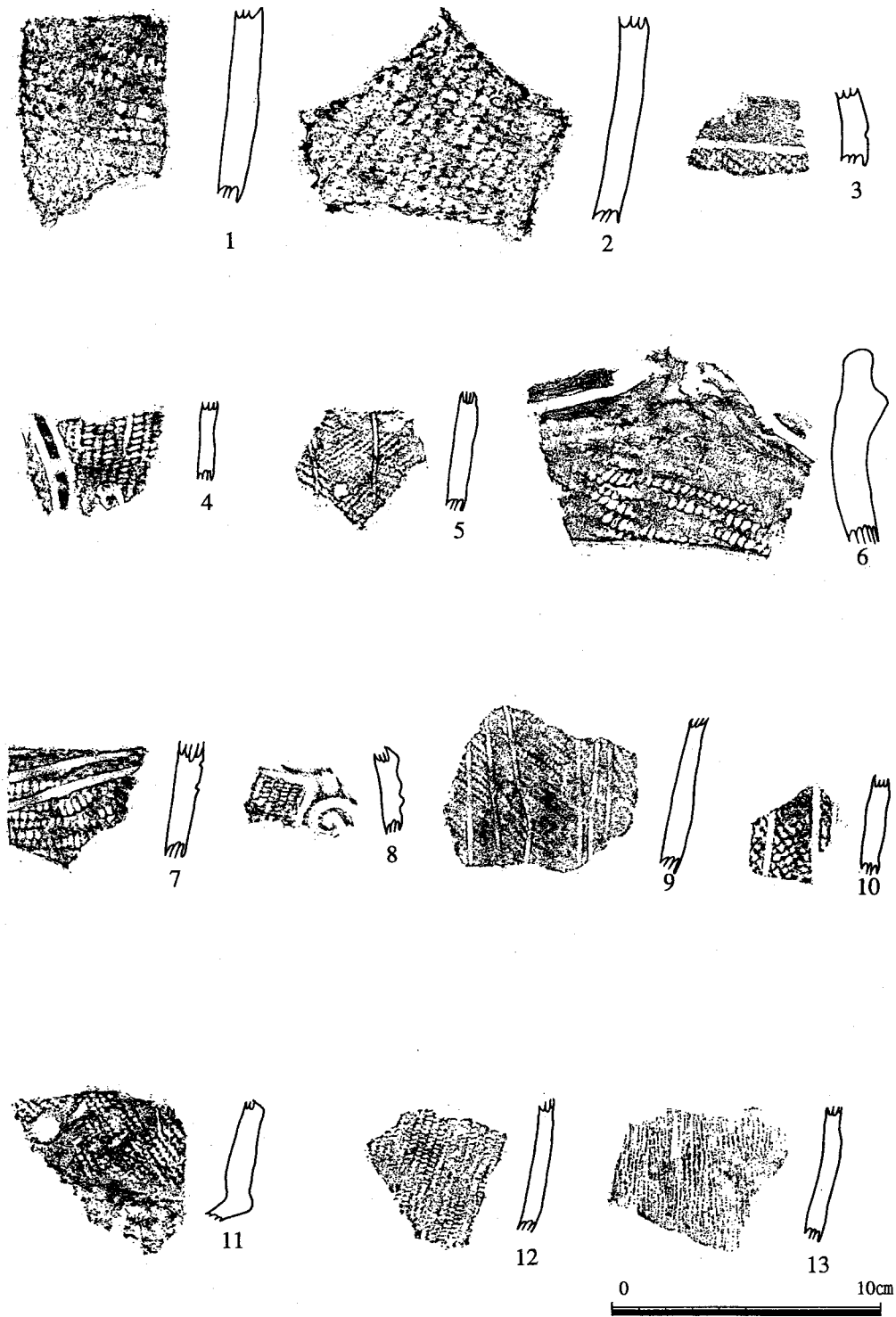
(4) 石器・石製品 (第12図)

調査区より、石匙1点、搔器1点、凹石2点、磨石1点、剥片5点が出土した。全て斜面部分からの出土である。また、有孔石製品が1点出土し、有孔石製品は石刀に似ている自然石の両側に孔が穿たれている。石器、石製品はいずれも縄文土器破片同様郭上部の天戸森遺跡から流れ込んだものであろう。

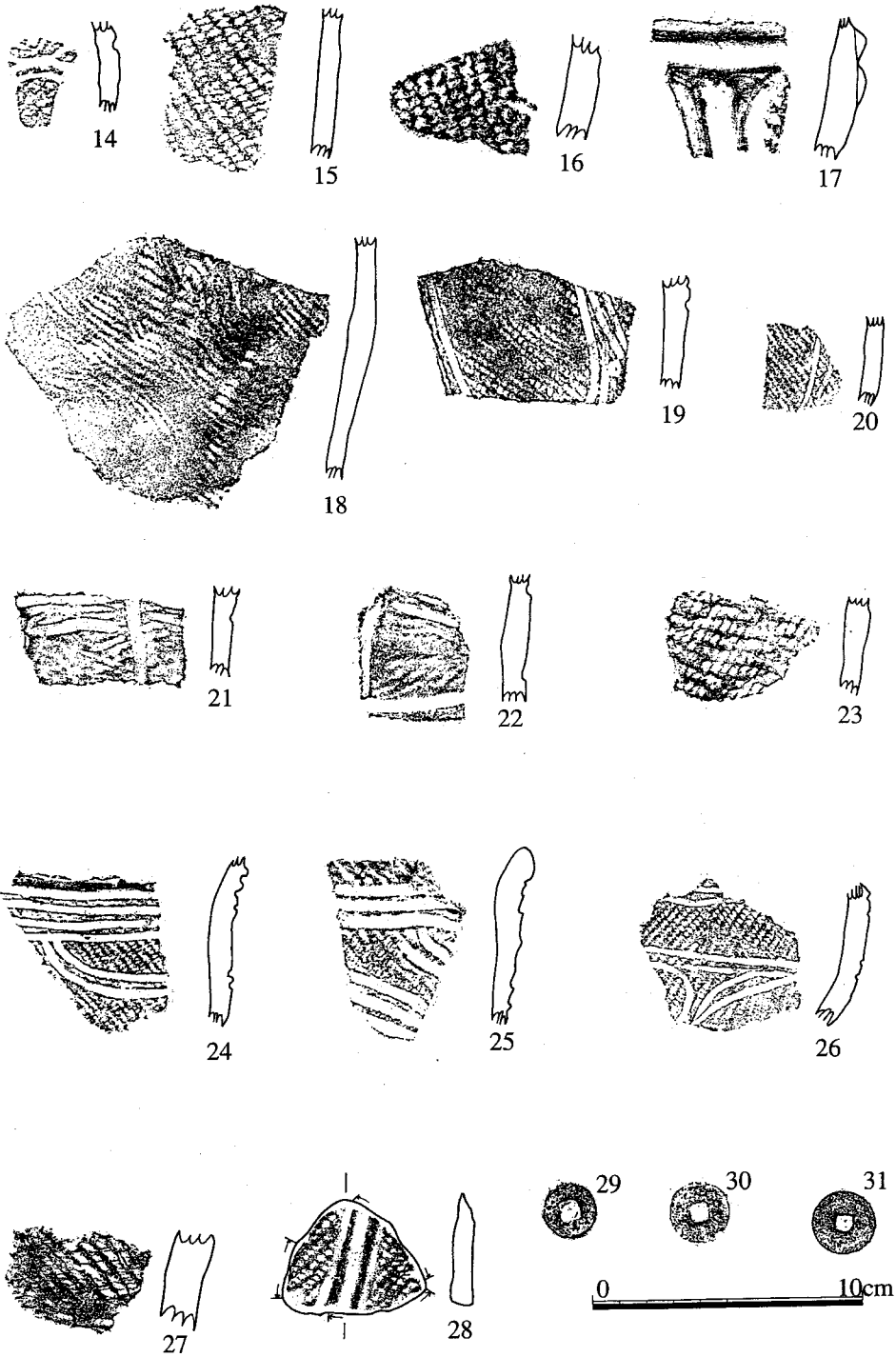
(花海義人)



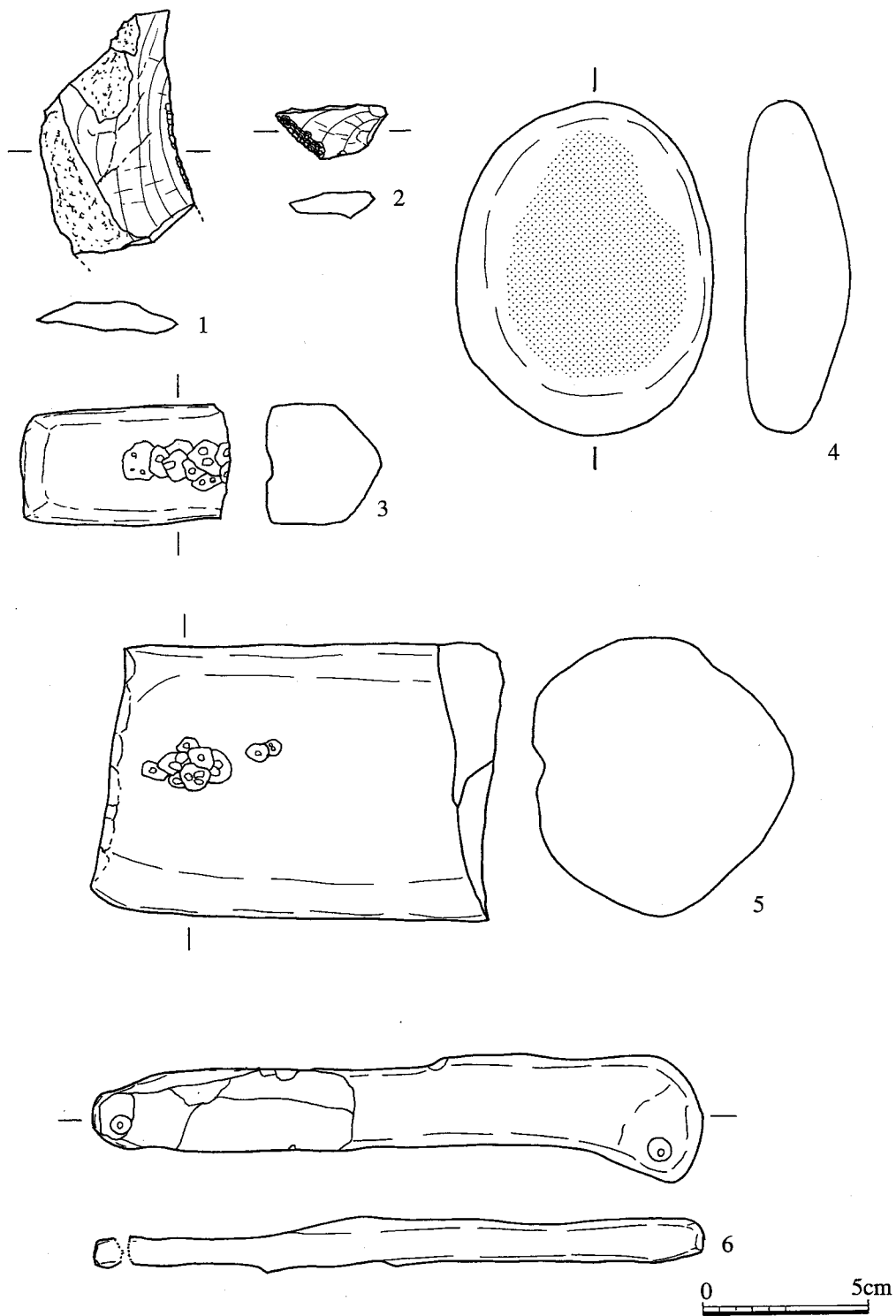
第9図 出土遺物 (1)



第10図 出土遺物(2)



第11图 出土遺物(3)



第12図 出土遺物(4)

第IV章 調査のまとめ

黒土館は、鹿角市花輪字陣場、字下夕町に所在する。館跡は、「皮投岳」を源として流れでる「福土川」右岸に発達した舌状台地を、空堀によって区切った7つの郭から構成されている。館跡からは、鹿角盆地北側や小坂の一部分までが見渡すことができ、立地条件としては良好の地である。

本年度は第Ⅶ郭の南側斜面に調査区を設定した。

調査は平成7年度からの継続調査で、本年度は2帯郭、空堀2条、縦堀り2基、小平場を検出した。遺物では、陶磁器19点、鉄滓12点、古銭3点、縄文土器破片108点、石器4点、土器片利用土製品1点、有孔石製品1点が出土した。

I帯郭では、これまで同様4期の構築時期が確認された。第1期目では斜面のシラス層を削り平場を作り出し、さらに空堀りが構築される。この平場は第1次調査区から連続しているもので、帯郭としての機能が考えられる。また、本年度は新たに帯郭南側で縦堀りが確認されており、縦堀りについては地羅野館跡調査時でも確認されていることから、鹿角地方の館構築方についての重要な手がかりとなると考えている。

また、第1期構築期ではI帯郭と同時に斜面中段にII帯郭が構築される。構築方としてはシラス層を多少削り、さらに郭上面及びI帯郭構築時の排土を利用し平場が作られている。

II帯郭はその後、一度盛土による手が加えられ使用され続ける。

空堀はこれまでの調査同様1期、2期面に作られている。本年度も空堀内底部付近より大小の礫がみられた。この礫の中には川原石が多くみられることから、郭上部からの流出物というよりは、意識的に持ち込まれたものと考えてよいだろう。館が防御的な施設であったことを考慮すると、礫が武器の一つとして使用されていたものと推測できる。

礫の武器説については、千田嘉博氏(1996、「考古学研究」)が鎌倉・室町時代の武器について研究したところ、まだ鉄砲が出現していない段階では、矢で殺された人が一番多く、以下礫、槍、刀の順であったと述べている。

このことから、本調査でみつかった空堀内の礫も防御のためのものである可能性が強いと思われる。

I帯郭では4度の構築時期が確認され、さらに、4期構築面で小規模な縦堀りも確認されている。同様の規模・形態の縦堀りが第1次、2次調査地でもみつまっている。縦堀り内の堆積土から多少の水が流れた痕跡があることから、排水に利用された施設であったと考えられる。

遺物は本館の構築時期に直接関連するものは出土しなかった。陶磁器では19Cのものが多くみられる。

肥前系の染付が大半を占め、青磁や唐津系もいくらかみられる。

遺物は、館構築時期を特定できるものは出土しなかったが、帯郭や空堀に数度にわたる改修が認められることは、築館期、最盛期、落館期、その後…というような館の歴史が黒土館に間違いなくあったことを裏付けるものである。

縄文期の遺物は、郭上部から流れ込んできた黒色土中からほとんど出土しており、文様等から郭上部の天戸森遺跡のものである。

第1次～4次の調査を通して、黒土館という館の歴史の一角に触れたにすぎないが、少しづつであるが史料の少ない館跡について理解が深まってきたのではと思う。

大きな点では、黒土館跡の構築方はⅢ、Ⅵ、Ⅶ郭とⅤ、Ⅰ、Ⅱ間に走る自然の沢部分を基本として作られているのではないだろうかということである。この沢部分はこれまで空堀としてとらえられてきたが、調査の結果帯郭が作られた部分以外の斜面には空堀として手が加えられた形跡がなかったことから、自然の沢であることが確認された。現在でも沢水が上流の方から流れていることから、恐らく侵食作用によって形成された台地の入江部分を巧みに利用したのだろう。また、沢の両岸に発達した台地を空堀で区画し、自然の沢を利用した堀には斜面中段を削り平場を作り出し、そこに小規模な空堀を作り出している。この空堀は堆積土中に水が流れた痕跡が認められたことから、防御と排水の同時利用が推測される。

また、帯郭は構築レベルがほとんど一定して作られており、当時の土木工事の精工さをうかがわせる。

急傾斜地崩壊対策事業としての黒土館跡調査は本年度で終えるが、まだまだ黒土館跡を含め館に関しては、謎が多い。今後も数少ない史料を元に、発掘調査から大きな成果が発見できればと考えている。

(花梅義人)

付 録

鹿角四十二館 近世初期の成立とみられる『鹿角由来集』には、次のように記載されている。

鹿角四拾二館に侍四十二人居候事

- 一、田山村に田山左京進領地館有、後に畑山三郎領ス
- 一、左比内村、左比内村采女領地館市に館有
- 一、湯瀬村、湯瀬中務領地、本名成田後ニ湯瀬刑部領す、本名安部也、一戸より来り館有
- 一、長峯村、長峯下總領知本名成田館有
- 一、三ヶ田村、三ヶ田左近領知本名阿保館有
- 一、谷内村、谷内三郎領知本名成田館有り、南部御先 御下以後一戸彈正左エ門領知本名武田なり、九郎正友と一處に被遣なり
- 一、長牛村、秋元彈正左エ門領知館有、彈正左エ門秋田牢人後に一戸攝津領知、一戸の二男長牛弥四郎先祖也、鹿角の旗頭に三戸より御一門南部九郎正友被遣石鳥屋村に居、此時一戸攝津一處に被遣
- 一、夏井村、夏井但馬領地本名阿保なり館あり
- 一、長内村、長内刑部領地本名安部なり館あり
- 一、白還村、白欠勘解由領知館有
- 一、石鳥屋村、石鳥屋五郎領知本名安部也、館有、後ニ南部九郎正友領ス、鹿角三百丁旗頭二三戸より被遣候
- 一、松館村、松館越前領知本名阿保也、館有
- 一、尾佐利村、尾佐利越中領知本名阿保也、館有
- 一、小豆澤村、小豆澤駿河領知本名秋元也、館有
- 一、大里村、大里上總領知行高千石本名阿保、館有、京都江被遣候上使頭丹治氏
- 一、玉内村、玉内大炊之助領ス本名阿保、館有、津輕へ牢人ス
- 一、花輪村、花輪次郎領知本名阿保、大里上總先 と兄弟也、花輪臥牛本館へ移、其子孫村替にて九戸の圓子へ知行三百石にて被遣、後ニ天正八年大光寺左エ門左正親を信直公より知行三千石にて被遣也、村数花輪、尾去利・石鳥屋、三ヶ田・夏井右五ヶ村領知、花輪村ハ大館也
- 一、黒土村、黒土丹後領地本名秋元、館有
- 一、高瀬村、高瀬土佐領知本名秋元、館有、知行村数久保田・用之目・花軒田・松山・高梨子館右六ヶ處也、居館高瀬也
- 一、高屋村、高屋筑前領地本名秋元、館有、秋田へ牢人以後信直公より佐藤近江知行被下

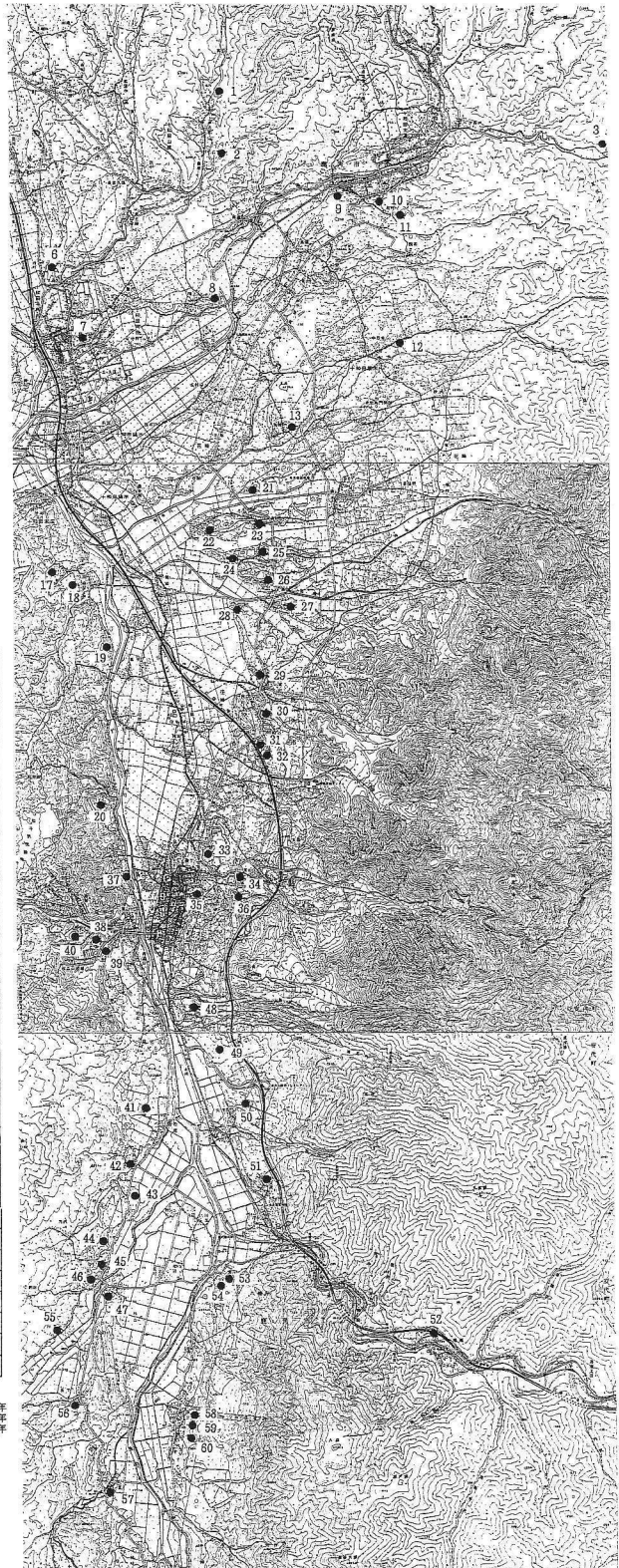
- 一、柴内村、柴内弥治郎領知本名阿保、知行三百石なり、花輪治郎領知本名阿保、館有
- 一、血牛村、血牛六郎領知本名阿保、館有
- 一、中柴内村、中柴内八郎領知本名阿保也、柴内弥治郎一門館有
- 一、折加内村、折加内甚右エ門領知本名阿保也、柴内弥治郎一門館有
- 一、高市村、高市玄番領知本名成田、館有（追筆）
- 一、新斗米村、新斗米左近領知本名奈良、館有
- 一、大湯村、大湯左エ門家来領地本名奈良の惣領也、嫡子四郎左エ門二男治郎左エ門、三男彦左エ門、右四郎左エ門天正一九年九戸へ一味仕被生捕九と一処に三迫にて切腹、治郎左エ門彦左エ門は津輕へ落行後に次郎左エ門被召出知行式百石拝領ス、彦左エ門は津輕ニ奉公ス、大湯村後ニハ大湯五兵衛領知
- 一、小枝指村、小枝差左馬領知本名奈良也、館有
- 一、小平村、小平彦次郎領知本名奈良也、小枝指之末弟也、館有（追筆）
- 一、神田村、神田十郎領知本名成田、居館基石館有
- 一、毛馬内町、毛馬内備中領知本名成田之惣領也、後ニ南部靱負信繼領知天文年中三戸より被遣知行高式千石村数毛馬内・瀬田石・大欠・赤澤・柏鉢・鰐口屋敷・管生鉢成候、毛馬内ニ館有
- 一、瀬田石村、瀬田石太郎左エ門領知館有、本名奈良、後に毛馬内大学領知家来月館隠岐知行分志和陳時隠岐武者奉行被仰付、忠擢る月館村七百石被下
- 一、大地村、大地甚之進領知本名成田、
- 一、小坂村、小坂筑後領知本名秋元、館有、後に大湯五兵衛領知
- 一、濁川村、濁川但馬領知本名秋元、館有、
- 一、荒川村、荒川備中領知本名成田、館有、
- 一、八幡館村、秋元兵部少領知砂子澤の事、館有
- 一、高清水村、高清水豊後領知本名成田、館有
- 一、関上村、関上安房領知本名成田、館有、
- 一、芦名澤村、芦名澤太郎兵衛領知本名奈良、館有、式部の館芦名澤観音札所也
- 一、草木村、奈良越後領知寺坂室田、居館丸館也
- 一、高梨子館村、高梨子土佐領知本名秋元、高瀬周防一門子無之絶、館有、後に奥四郎左エ門領ス、この四郎左エ門糖部三戸より文明中に来る、川原館に居す

鹿角市史第1巻より転載した。

鹿角由来集に記載された館跡

| 番号 | 館名 | 館主名 () | 館主姓 | 所在地 |
|----|---------|----------|------|-------------------|
| 1 | 高清水館跡 | 高清水重後 | (成田) | 鹿角市十和田山根字鹿ヶ沢 |
| 2 | 戸名沢館跡 | 戸名沢太郎兵衛 | (奈良) | 山根字向田・字上砂沢 |
| 3 | 島寄館跡 | 北島昌教 | | 大湯字上折戸 |
| 4 | 大坊館跡 | | | 毛馬内字大坊屋 |
| 5 | 瀬田石館跡 | 瀬田石太郎左衛門 | (奈良) | 瀬田石字小笹根ほか |
| 6 | 当麻館跡 | 毛馬内備中 | (成田) | 毛馬内字古館ほか |
| 7 | 柏崎館跡 | | | 毛馬内字柏崎ほか |
| 8 | 園上(神)館跡 | 園神安房 | (成田) | 大湯字園上ほか |
| 9 | 蓮合館跡 | | | 大湯字古館ほか |
| 10 | 大湯館跡 | 大湯佐左衛門督 | (奈良) | 大湯字和町 |
| 11 | 疎遠館跡 | | | 大湯字和町 |
| 12 | 草木館跡 | | | 草木字鹿下々 |
| 13 | 丸館跡 | | | 草木字丸鹿ノ下 |
| 14 | 高梨館跡 | 高梨土佐 | (秋元) | 末広字高梨子館ほか |
| 15 | 松山館跡 | | | 末広字下輪平 |
| 16 | 萩石館跡 | 神田十郎 | (成田) | 末広字神田沢 |
| 17 | 太田谷地館跡 | | | 花輪字太田谷地ほか |
| 18 | 高麗館跡 | 高麗筑前 | (秋元) | 花輪字高ノ沢ほか |
| 19 | 花輪茶臼館跡 | | | 花輪字茶臼館ほか |
| 20 | 高瀬館跡 | 高瀬土佐 | (秋元) | 花輪字高瀬館ほか |
| 21 | 一ツ森館跡 | | | 花輪字一ツ森ほか |
| 22 | 小枝指館跡 | 小枝指左馬之助 | (奈良) | 花輪字小枝指ほか |
| 23 | 平元館跡 | | | 花輪字平元ほか |
| 24 | 新斗米館跡 | 新斗米左近 | (奈良) | 花輪字新斗米 |
| 25 | 小平館跡 | 小平彦次郎 | (奈良) | 花輪字小平ほか |
| 26 | 高市向館跡 | | | 花輪字高市向 |
| 27 | 高市館跡 | 高市玄 | (成田) | 鹿角市花輪字高市 |
| 28 | 乃谷野館跡 | | | 花輪字乃谷野 |
| 29 | 地蔵野館跡 | 中柴内八郎 | (安保) | 花輪字地蔵野 |
| 30 | 柴内館跡 | 柴内弥次郎 | (安保) | 花輪字西町・字乳牛平ほか |
| 31 | 乳牛館跡 | 乳牛六郎 | (安保) | 花輪字乳牛平ほか |
| 32 | 妻ノ神館跡 | | | 花輪字妻ノ神ほか |
| 33 | 黒土館跡 | 黒土丹後 | (秋元) | 花輪字下々町 |
| 34 | 花輪古館跡 | 伝・花輪次郎 | (安保) | 花輪字古館ほか |
| 35 | 花輪館跡 | | | 花輪字中花輪ほか |
| 36 | 孫右エ門館跡 | | | 花輪字孫右エ門ほか |
| 37 | かいぬま館跡 | | | 尾去沢字土沢 |
| 38 | 茶臼館跡 | | | 尾去沢字新堀ほか |
| 39 | 上山館跡 | | | 尾去沢字上山ほか |
| 40 | 尾去館跡 | 尾去越中 | (安保) | 尾去沢字尾去ほか |
| 41 | 松館跡 | 松館越前 | (安保) | 尾去沢字天神館ほか |
| 42 | 石鳥谷館跡 | 石鳥谷九郎 | (安保) | 八幡平字石鳥谷ほか |
| 43 | 伊勢堂館跡 | | | 八幡平字伊勢堂 |
| 44 | 上ミ和志貫館 | | | 八幡平字上ミ和志貫ほか |
| 45 | 長内館跡 | 長内内郎 | (成田) | 八幡平字長内ほか |
| 46 | 長内古館跡 | | | 八幡平字長内古館ほか |
| 47 | 三ヶ田館跡 | 三ヶ田左近 | (阿部) | 八幡平字三ヶ田・字上堀ほか |
| 48 | 玉内館跡 | 玉内大次郎 | (安保) | 八幡平字玉内ほか |
| 49 | 下館跡 | | | 八幡平字駒林・字下葛岡 |
| 50 | 大里館跡 | 大里上總守 | (安保) | 八幡平字大里・字惣合 |
| 51 | 小豆沢館跡 | 小豆沢駿河 | (秋元) | 八幡平字小豆沢ほか |
| 52 | 湯瀬館跡 | 湯瀬中務 | (成田) | 八幡平字湯瀬館 |
| 53 | 長峰館跡A | 長峰下總 | | 八幡平字瀨東館・字西館ほか |
| 54 | 長峰館跡B | | | 八幡平字新誠ほか |
| 55 | 白懸館跡 | 白懸勘解由 | | 八幡平字白懸 |
| 56 | 長牛館跡 | 秋元弾正左衛門 | | 鹿角市八幡平字長牛・字カラメ田ほか |
| 57 | 夏井館跡 | 夏井但馬 | (安保) | 八幡平字夏井・字寺山ほか |
| 58 | 谷内館跡A | 谷内三郎 | | 八幡平字谷内下モ平ほか |
| 59 | 谷内館跡B | | | 八幡平字谷内 |
| 60 | 谷内高館 | | | 八幡平字堂町 |
| A | 田山館跡 | 田山右京進 | | 岩手県二戸郡安代町字藪ノ野 |
| B | 佐比内館跡 | 佐比内采女 | | 岩手県二戸郡安代町館市 |

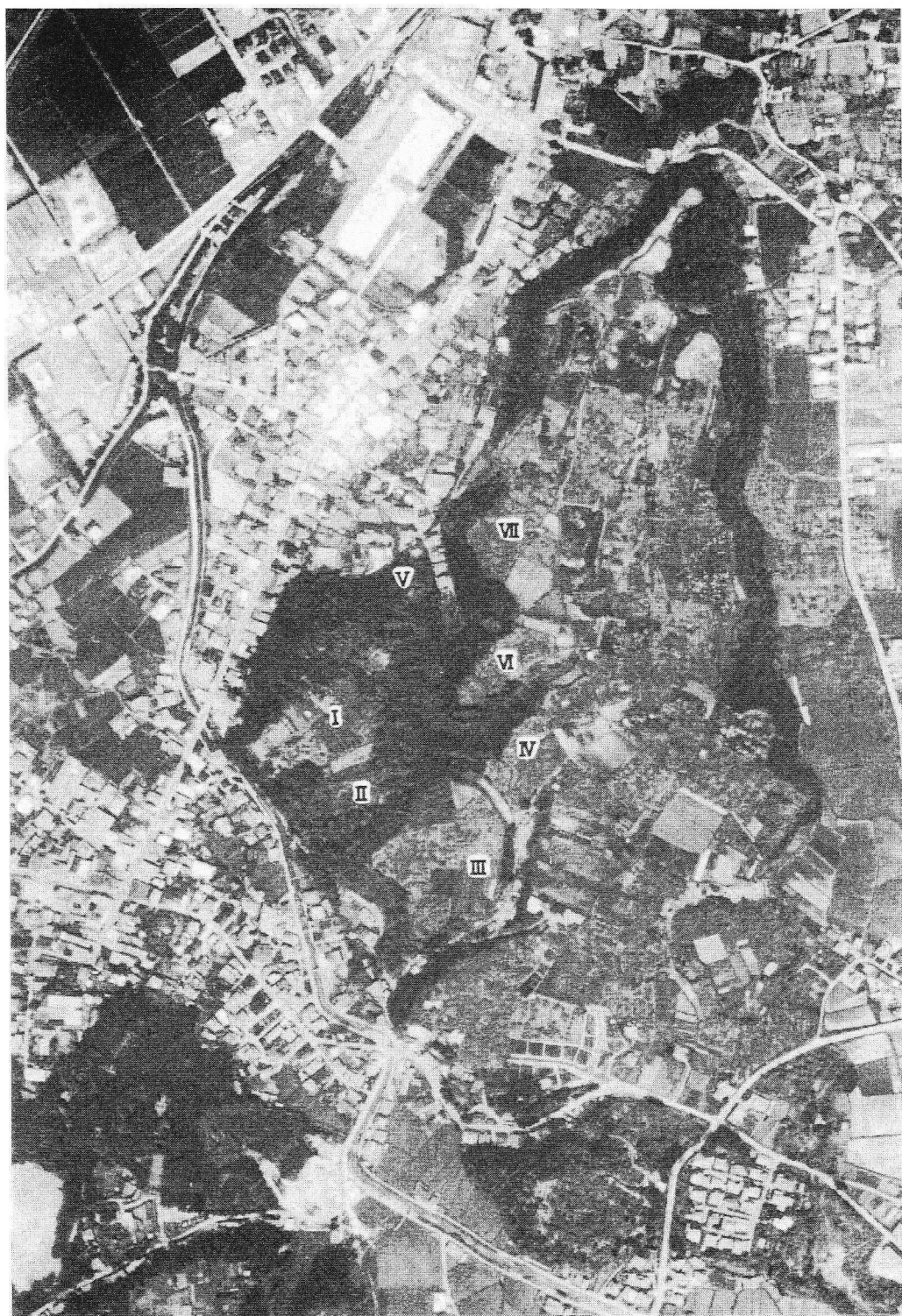
※印は、鹿角由来集に掲載された館跡
 ○本表付録に添えては、下記の資料を用いた
 『鹿角由来集』 秋田県文化財調査報告書86集 秋田県教育委員会 1981年
 『湯瀬館跡』 秋田県文化財調査報告書78集 秋田県教育委員会 1981年
 『道跡詳細分布調査報告書』 鹿角市文化財調査資料39集 鹿角市教育委員会 1990年



第13図 館跡分布図

参考文献

- 東京大学東洋文化財研究所 『館址 東北地方における集落址の研究』
東京大学出版社 1958年
- 青森県教育委員会 『中の平遺跡』 1975年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 1981年
「天戸森遺跡」
『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1994年
- 鹿角市 『鹿角市史第Ⅰ巻』 1982年
- 鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡発掘調査報告書』 1984年
『天戸森の土器 天戸森遺跡出土縄文土器図録』 1990年
『鹿角の館(5) 館跡航空写真測量調査報告書』 1986年
『黒土館跡発掘調査報告書』 1996年
『黒土館跡発掘調査報告書2』 1997年
『黒土館跡発掘調査報告書3』 1998年
『地羅野館跡発掘調査報告書』 1993年
『小枝指館跡発掘調査報告書』 1992年
『花輪古館跡発掘調査報告書』 1994年
- 富樫泰時・安村二郎 『秋田県』『日本城跡大系 2』 新人物往来社 1980年
- 安村二郎ほか 「鹿角地方の館跡 航空写真測量調査に関して」
『よねしろ考古 4』 よねしろ考古学研究会 1988年
- 村越 潔 『円筒土器文化』 雄山閣 1974年
- 永井久美男 編 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類』 兵庫県埋蔵銭調査会
1994年
- 浪岡町教育委員会 『浪岡城跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅹ』 1978年～
- 鹿角市企画部秘書広報課 広報『かづの』『ふるさとの歴史風景1～29』
安村二郎 記
- 矢部倉吉 『古銭と紙幣』—収集と鑑賞—金園社 1973年
- 佐原 真 『歴史書通信』～歴史の愉しみ—古代から現代へ(後)
歴史書懇話会 1999年 No.121

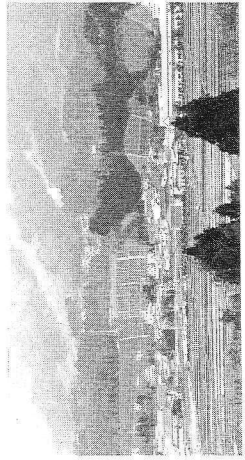


P L 1 黒土館跡全景(1)

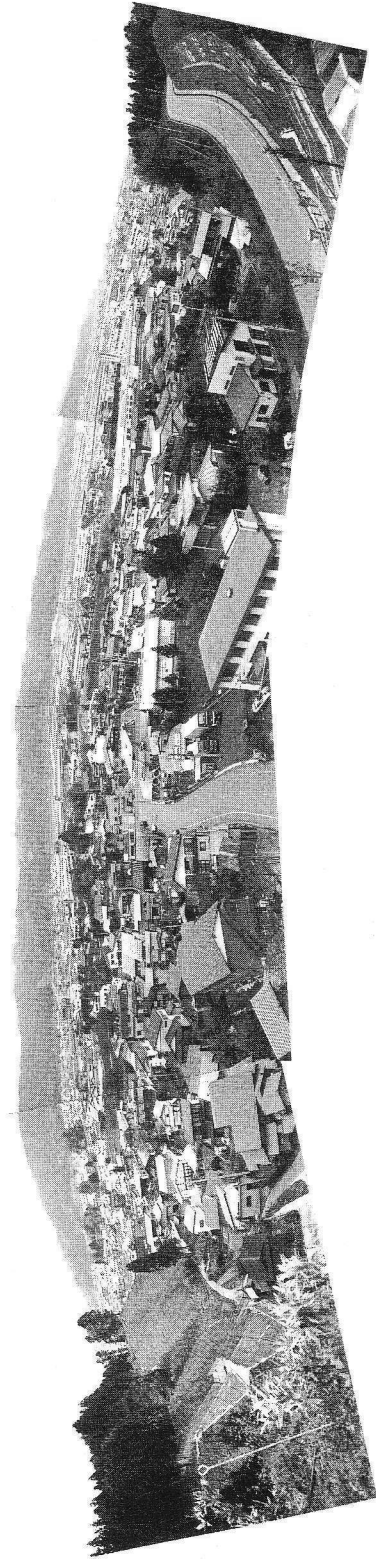
P L 2 黒土館跡全景(2)



高瀬館方向から黒土館を望む



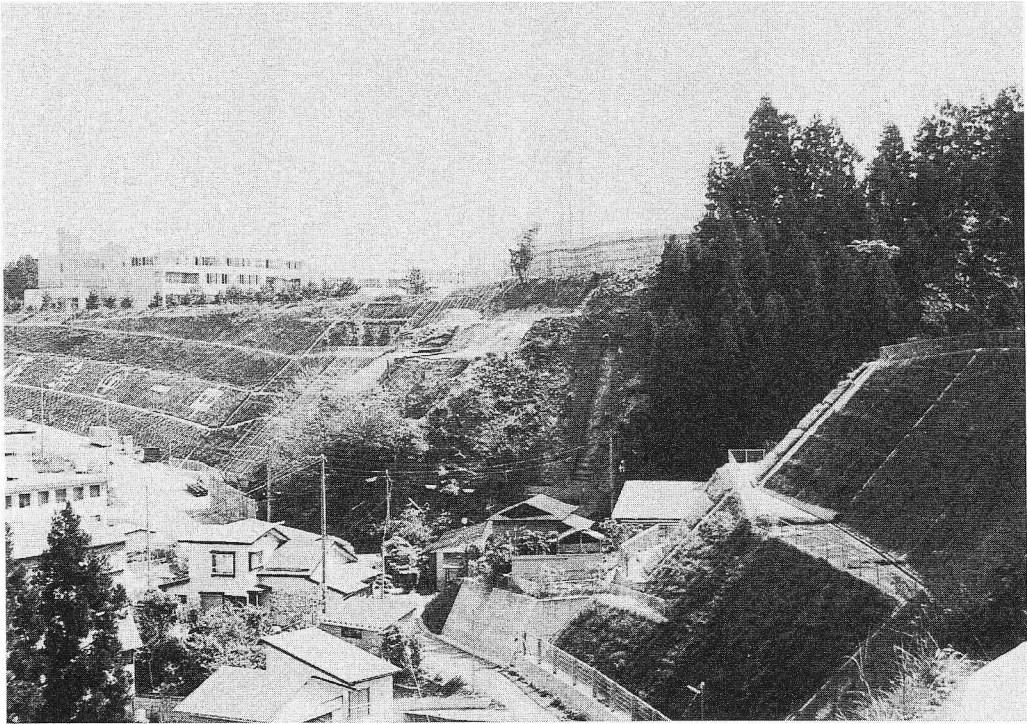
調査地全景 (後の山が鹿角総合運動公園)



黒土館から鹿角盆地を望む

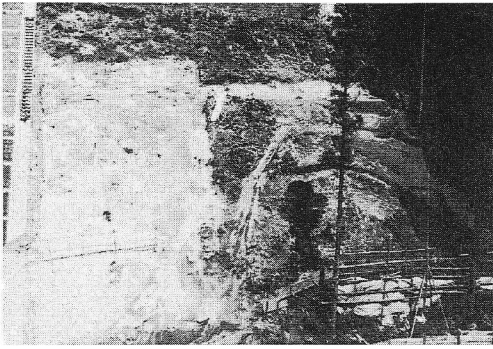


黒土館跡全景（昭和57年当時）

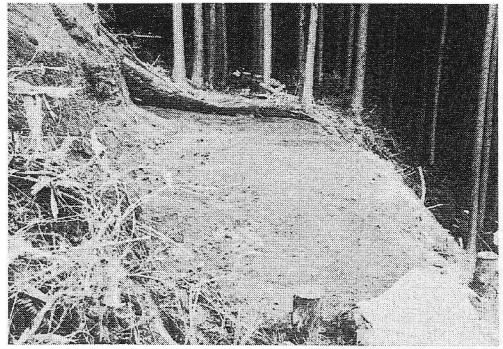


調査区全景

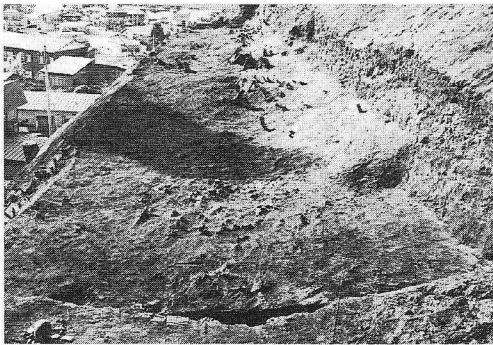
P L 3 黒土館跡全景・調査区全景



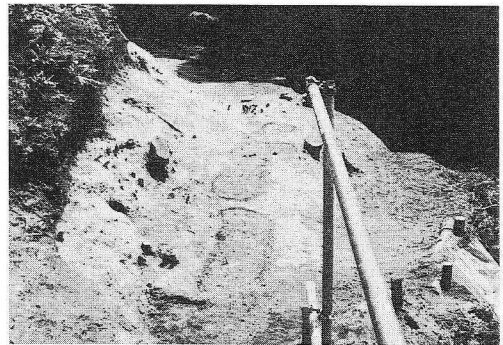
調査区全景



I 帯郭 4 期構築面



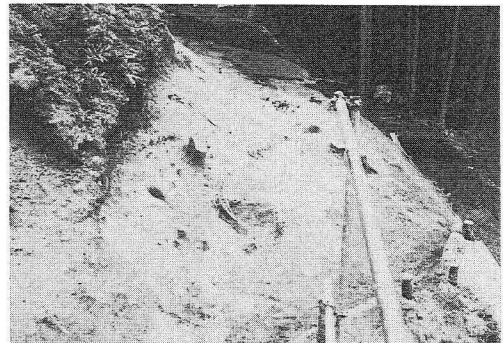
II 帯郭 2 ~ 4 期構築面



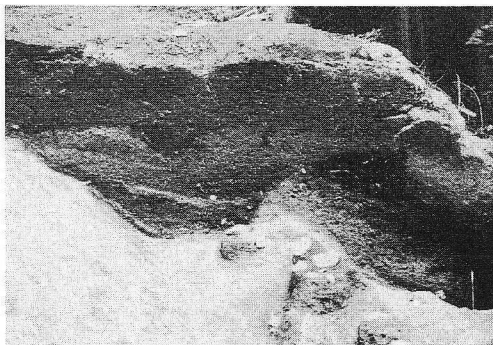
I 帯郭 3 期構築面



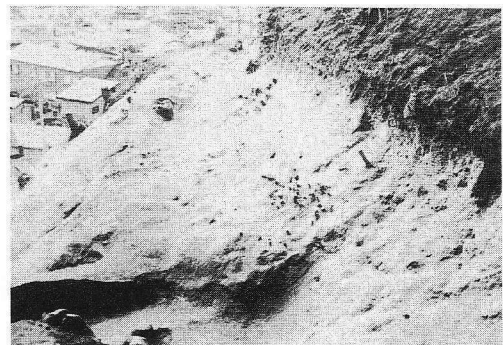
II 帯郭土層



I 帯郭 2 期構築面

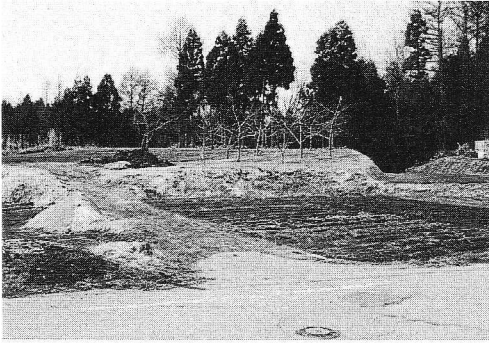


II 帯郭空堀土層断面

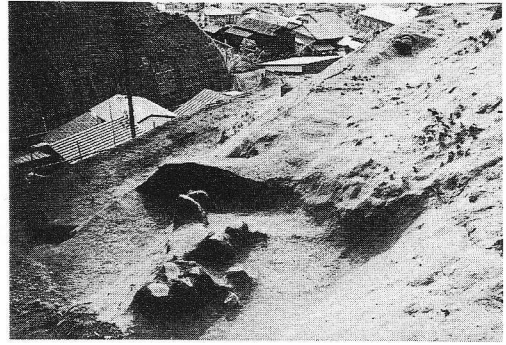


I 帯郭 1 期構築面

P L 4 調査区全景



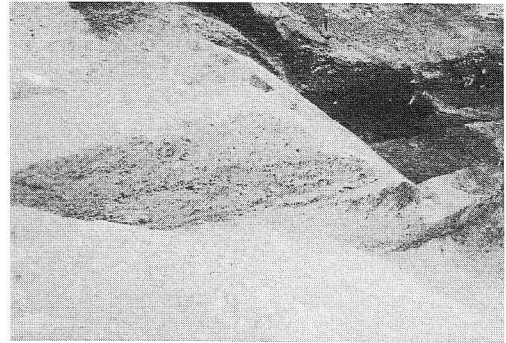
IV郭全景 (NE→SW)



I 帯郭空堀



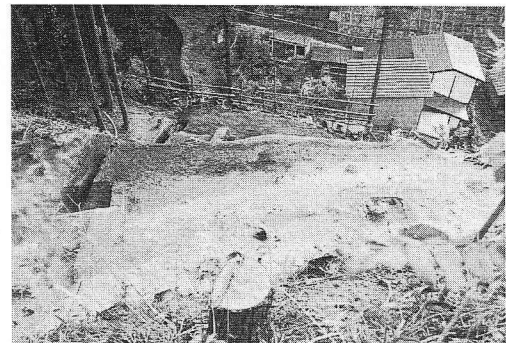
III、IV郭間の空堀 (E→W)



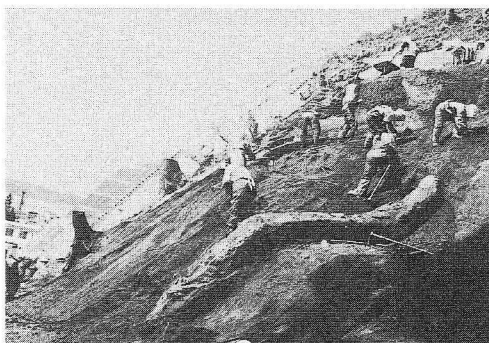
I 帯郭縦堀土層



I、V郭間の空堀 (E→W)



調査区全景 (上から)

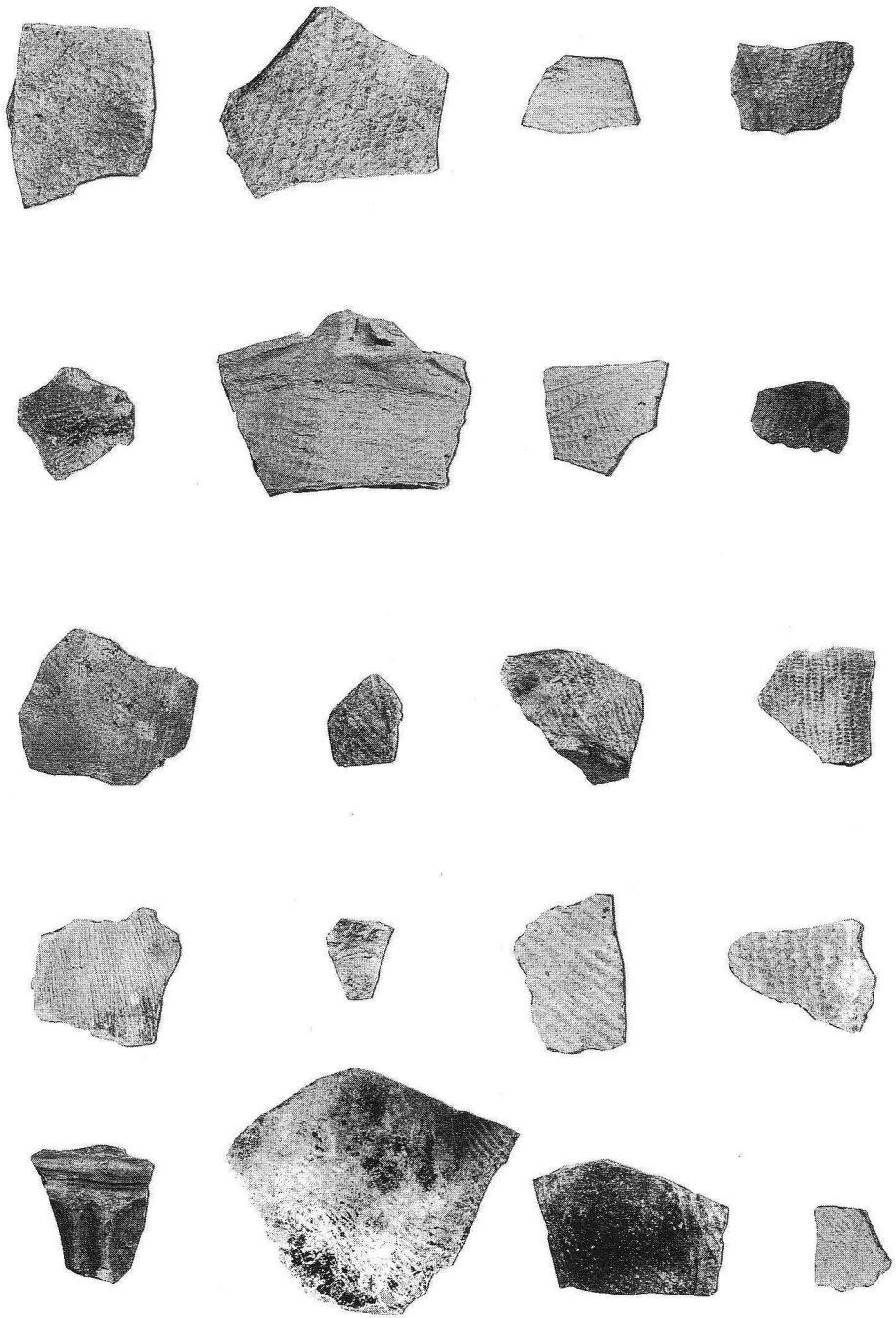


作業風景



V、VI郭間の空堀

PL 5 調査区全景



PL 6 出土遺物 (1)



PL7 出土遺物 (2)

報告書抄録

| ふりがな | くろとたてあと はつくつちようさほうこくしよ | | | | | | | |
|-----------------|---|-------|-------------------------|----------------------|---|--|------------------------|-----------------------------------|
| 書名 | 黒土館跡発掘調査報告書(4) | | | | | | | |
| 副書名 | 急斜面地崩壊防止事業に伴う発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 鹿角市文化財調査資料 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 64 | | | | | | | |
| 編著者名 | 鹿角市教育委員会 (生涯学習課) | | | | | | | |
| 編集機関 | 鹿角市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1999年 3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | ° ' " | ° ' " | | | |
| くろとたてあと 黒土館跡 | あきたけん かつのし 秋田県鹿角市 はなわあざ 花輪字 したまち 下夕町 ほか | 05209 | 306 | 40度 11分 73秒 | 140度 47分 93秒 | 19980413 ～ 19980520 | 437 77 | 緊急地方 道路整備 事業に係 る発掘 調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 黒土館跡 | 館跡 | 中世 | 帯郭段築 空堀 縦掘 小平場 | 2段 2状 2基 1段 | 陶磁器 古銭 鉄滓 縄文土器 石器 土器破片利用土製品 石製品 | 「鹿角四十二館」 の一つで7郭から 構成される。 館主は黒土三郎 と伝えられる。 調査は館跡の北 端部であったが館 跡の構造の一端を 知ることが出来た。 | | |

鹿角市文化財調査資料 64

黒土館跡発掘調査報告書(4)

発行年月日 平成11年3月31日

発行者 鹿角市教育委員会
〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1
☎ 0186-30-1111

印刷所 〒018-5141 秋田県鹿角市八幡平字高見田50
(資)石木田印刷所
